



WARE MUCHUJIN

Vol. 214

夢中人



“二足のわらじ” 人生 (医学と音楽)

米澤 傑

医療法人玉昌会 キラメキテラスヘルスケアホスピタル トータルウェルネスセンター センター長・
鹿児島大学 名誉教授 (医学部・病理学)・鹿児島市医師会病院 病理部 顧問



オペラ『トゥーランドット』の舞台



日本病理医フィルハーモニーとの共演
(横浜市・横浜みなとみらいホール/大ホール)



米澤傑テノールリサイタルで、妻の悦子との二重唱「乾杯の歌」
(鹿児島市・宝山ホール)



日本病理学賞の表彰状と表彰盾



日本病理学賞の表彰式

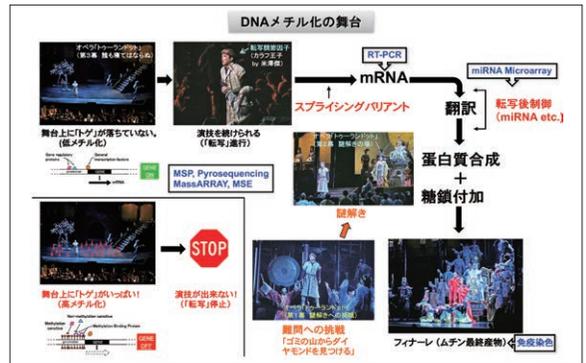


「医学」では、日本病理学会で最も名誉ある「日本病理学賞」を受賞、「高松宮妃癌研究基金助成金」受領、各種がんマーカー論文の著者世界ランキング第6位（日本人第1位）。

私は、2010年4月28日、東京での第99回日本病理学会総会において、宿題報告講演「ムチン：ヒト癌における臨床病理学的意義と遺伝子発現機構の解明から腫瘍悪性度早期診断システムの構築まで」を行い、日本病理学賞を受賞した。研究成果のまとめスライドに、私がカラフ王子を演じているオペラ『トゥーランドット』の画像を使用した。1枚のスライドに「二足のわらじ」人生が盛り込まれている。

なお、その後、すぐに東京から京都に移動し、翌日4月29日には、京都会館開館50周年記念「第九演奏会」（井上道義指揮、京都市交響楽団）で、テノールのソリストを務めるという綱渡りをした。まさに、「二足のわらじ」人生の典型例である。現在は、病理専門医としての病理組織診断に加え、医療法人玉昌会 キラメキテラスヘルスケアホスピタル トータルウェルネスセンターのセンター長として、年間1万数千件の健診における内科的診察と、30を超える企業の産業医として、職場巡視や心身に問題を抱える職員への個別面談など、臨床医学と社会医学の職務も行っており、「医学・医療」だけでも、「三足のわらじ」を履いていることになり、以下に述べる「音楽活動」を加えると、「四足のわらじ」を履いていることになる。

「音楽」では、幼稚園の学芸会での『桃太郎』。徳島県立城南高等学校の時に「NHKのど自慢全国コンクール」徳島県大会の歌曲の部で優勝。「日本クラシック音楽コンクール全国大会」声楽部門第1位、ならびに、全部門でのグランプリ獲得。「太陽コンコルソ・カンツォーネ・イタリアーナ」優勝。平成



宿題報告講演に使用した研究成果のまとめスライド

10年度「鹿児島県芸術文化奨励賞」。CD「誰も寝てはならぬ / 米澤 傑 テノール・オペラアリア集 (G. ステファノ指揮、ソフィア国立歌劇場管弦楽団)」(「CD/DVDのご案内」の中央)のヒットチャートでの度々の第1位。オペラ『トゥーランドット』の主演・カラフ王子(「CD/DVDのご案内」の右側)。

私の音楽活動の発展は、奇跡ともいえる“出会い”と“ご縁”による。

1985年の「第1回かごしま県民第九演奏会」の2カ月ほど前に、高名な指揮者の井上道義先生が、鹿児島でレッスンをしてくださった。私が、テノールソロを歌い始めた途端、井上先生は指揮をやめて、ピョンと舞台から飛び降り、ホールの最後部まで走って行って、腕を組んで、私のソロを聴いていらした。私の声の「響き」をお確かめになっていたと想像している。翌年の春、「井上道義です。NHKの“第九をうたおう”という番組で、米澤さんにテノールのソリストをお願いしたい」とのご依頼を頂いた。この“第九をうたおう”の全国放送をきっかけに、全国各地より『第九』のソリストのお話を頂き、ナポリ市のサン・カルロ歌劇場での「第九のナポリ公演」も含め、『第九』のソリストは100回を超える。

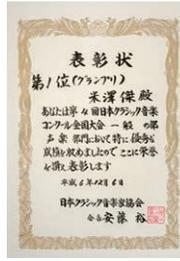
『第九』アジア初演の地・私の故郷の「鳴門の第



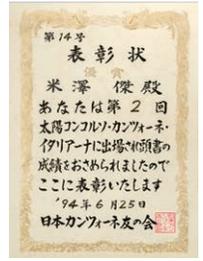
幼稚園の学芸会での『桃太郎』



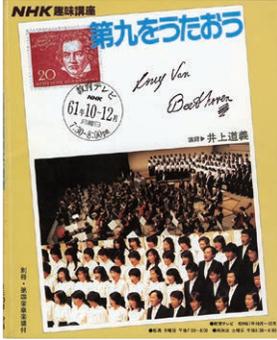
NHK のど自慢全国コンクール徳島県大会 歌曲の部での優勝盾



日本クラシック音楽コンクール全国大会 声楽部門第1位、ならびに、
全部門でのグランプリの表彰状



太陽コンコロソ・カンツォーネ・イタリアーナ優勝の表彰状



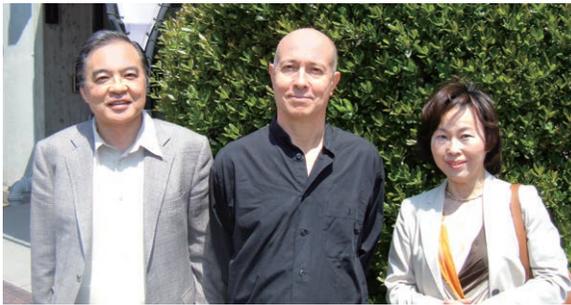
「NHK趣味講座 第九をうたおう」のテキスト（日本放送出版協会）



CD/DVD のご案内



CD「誰も寝てはならぬ／米澤傑テノール・オペラアリア集」のヒットチャート第1位（2009年7月1日付「J-Classical ウィークリーチャート」）/ 出典：@TOWER.JP（現 TOWER RECORDS ONLINE）



京都での第九演奏会の前に、指揮者の井上道義先生（中央）と。



ピアニスト・今岡淑子氏との共演（鹿児島市・サンエールかごしま）



オペラ『トゥーランドット』の舞台

九]にも頻繁に招聘され、1996年6月、国際的ソプラノ歌手の松本美和子先生と初めて共演。松本先生が「1週間後に、イタリアの高名なオペラプロデューサーのジャンフランコ・パスティネ先生が東京にお越しになるから、ぜひ、あなたの声を聴いていただきたいの!」とのことで、私の歌声をお聴きいただいたところ、お二人が歌手に転向してのイタリアデビューをお勧めくださった。私が医学の道を変えないと申し上げたところ、「オペラシーズンの1カ月半だけイタリアで歌い、後は、医学の仕事をしていから」とまでおっしゃってくださったが、当時、助教授であった私が「3年後に教授選があります。医学部の教授選はかなりの難関です」と申し上げたところ、やっとご理解くださった。

幸運な“出会い”と“ご縁”が、一流の指揮者や交響楽団との共演、オペラ『トゥーランドット』への主役出演、さらには、世界一流の歌手とのジョイントリサイタルへ発展し、ニューヨークの音楽記者が「米澤の歌った『清きアイダ』の最後の高音は、メトロポリタン歌劇場でも聴いたことのない素晴らしいものであった」と世界中に発信した。

フルオーケストラでのオペラアリア集の発行を目指したが、大手レコード会社でも費用的にとても無理とのことで、松本先生からパスティネ先生にご相談いただいたところ、パスティネ先生が、イタリア人指揮者のジョヴァンニ・ディ・ステーファノ氏とブルガリアのソフィア国立歌劇場管弦楽団にご依頼くださり、2004年のゴールデンウィークに、4日間連続で15曲の収録を行い、CD「誰も寝てはならぬ」(前述)をリリースできた。松本先生は、CDジャケットに「四日連続でこれだけの難曲を録音できたテノール歌手はかつて誰もいません。米澤さんはこの驚くほかは離れ業を成し遂げてしまったのです」とお書きくださっている。日本人テノール歌手で、フルオーケストラでのオペラアリア集を発行できているのは、プロ歌手を含めても、私一人のみである。このCDは、高名なピアニストの辻井伸行さんのCD「debut」、庄司紗矢香さんのヴァイオリン協奏曲、小澤征爾さん・渡邊暁雄さん・小林研一郎さん・堤俊作さんといった高名な指揮者の交響曲

のCDも抑えて、何度もヒットチャート1位を獲得している。マイケル・ジャクソンが急逝して、彼のCDが話題になった際でも、ポピュラー音楽も含めた洋楽アルバムの部門で、マイケル・ジャクソンのCD「ナンバー・ワンズ」に負けず、ヒットチャート1位を維持していた。

2019年には、CD「米澤 傑 テノール ライブ」(「CD/DVDのご案内」の左側)をリリース。コロナ禍前の録音で、客席からの“ブラボーや歓声の嵐”という臨場感を味わえる。

「医学」と「音楽」の共通点は、まさに「長〜い苦しみ、一瞬の喜び」である。

「医学」の研究を積み重ねて英文論文を書き、国際医学雑誌に投稿してもReject(門前払い)されることが多い。査読に回っても、指摘された改訂点について、実験のやり直しやデータの見直しをして論文を書き直すという「長〜い苦しみ」を体験した後、Accept(採用)という通知を得た瞬間が「一瞬の喜び」である。

「音楽」も同様で、その典型が、オペラ『トゥーランドット』の主役・カラフ王子役で、私以外の出演者は全て二期会のトップスター歌手であった。公演の2年前にお話を頂き、ピアノ譜でも厚さが3cmはある全曲楽譜とCDを購入し、歌詞とメロディーを覚え込んだ。本番4カ月前から舞台稽古が始まり、月曜日から金曜日までは医学部教授の仕事を行い、週末1泊2日で藤沢での舞台稽古に参加という“ゾツとするような二重生活”が続いた。本番で、見事にカラフ王子役を歌い演じきり、幾度にもわたる“ブラボーの嵐”のカーテンコールの後、幕が降りた舞台上で、演出の栗山昌良先生から「これで、ひとりのテノールスターの誕生だな!」とお言葉…まさに「長〜い苦しみ、一瞬の喜び」の典型例で、「一瞬の喜び」があるからこそ、長く苦しい練習にも耐えられるのである。

